



レース畑から見たGS

# 元ヨシムラの 浅川邦夫 インタビュー

文●石橋知也 写真●小見哲彦 / 浅川邦夫

本誌連載企画でもおなじみの浅川さんは、言わずと知れた元ヨシムラのスタッフだが、その彼が78年GS1000の鈴鹿8時間耐久レース車を製作、シェイクダウンを行ったことはあまり知られていない。本人から借用した写真と合わせ、当手を振り返ってみる。



## 「GS1000の慣らしをしてくれないか」

1978年、第1回8耐の直前。POP吉村こと吉村秀雄の愛弟子で、GS1000とヨシムラレーサーを知る貴重な証人のひとり、浅川邦夫さん（現アサカワスピード代表）は、POP本人からこう言われた。

浅川さんはヨシムラレーシングのチームスタッフではあったが、社員ではなかった。当時、ヨシムラではセッティングの確認を行うライダーがいなかったのだ。

POPこそ8耐の準備で帰国中だったけれど、ヨシムラ本体は「ヨシムラR&Dアメリカ」として、ロサンゼルス近郊にワークショップを構えていた。長男の不二雄さん（現ヨシムラジャパン社長）以下、メインスタッフはアメリカにいたのだ。

だから、日本ではPOPの次女・由美子さんと結婚した加藤昇平さんが厚木市内に起こした「ヨシムラパーツショップ加藤」が拠点だったが、昇平さんはケガのため、GS1000に乗れなかった。

「バイクはオヤジさん、オレ、大矢（現在はヤマハのエンジン開発などを請け負う大矢技研代表）で組んでいた」

社員メカは大矢さんだけ。浅川さんは、MCFAJでノービスチャンピオンにもなり、走れてメカもできる手近な存在だったのだ。

富士スピードウェイで8耐号のシェイクダウンが始まった。バイクはスーパーバイク仕様に簡単なアッパーカウル、ヘッドライト、給油用クイックフィルター付きタンクが装備された簡素な耐久仕様。フレームはAMAスーパーバイクにならってSTDを補強し、KYBのGS用スペシャルリヤショック（RG用から派生）はレイダウンマウントされていた。フロントフォークも37mm径とSTDと同径ながら肉厚インナーチューブなどで強化されたタイプ。チェーンはRK製シールチェーン（初のシールタイプ）。でも、敵のホンダRCBは車体もエンジンも、何から何までファクトリーで仕上げた本物の耐久レーサーだった。

「富士を走り始めたら、慣らしなのに、それまでの自己ベストを軽く更新。スゲーなあ。やっぱり本物は違うなあって、つついスロットルを開けちゃって」

TZなどの市販レーサーをおもしろいようにオーバーテイクできた。もちろん、それまで浅川さんが乗っていたZ2改（自作）やGS750（ヨシムラ製）などのプロダクション

レーサーは目ではなかった。

浅川さんは決断した。社員でもないのに、赤いヨシムラのロゴが入った白いウエアを着て、8耐のピットに立ったのだ。

「ヨシムラではホイールが足りないんで、オレのモーリスを貸したんだよ」

その浅川モーリスは、8耐号のフロントに装着されていた。

「とにかくシャシーのいいGSでも、スポークジャフフロントのフレがひどいので、まず、フロントだけでもと思って買っておいたヤツだよ」

8耐号には、不二雄さんたちがアメリカから持ち込んだグッドイヤーのスリックが入っていた。当時、前後スリックで走ることができるプロダクションレーサーはほとんどなく、RCBも同様だった。ヨシムラのスーパーバイクも77年まではフロントに溝付きレース用のミシュランPZ2、リヤにグッドイヤーのスリックという組み合わせで、グリップのいいスリックをフロントに入れると、それが災いしてフレが出るのだ。

「この辺は、現行のネイキッドでも同じことが言えるし、GSやZはもちろんそう。前後18インチのほうが、ベースフレームとのバランスがいいのも同じ」

こうして8耐に突入。レース前にはクラッチダンパーの容量・強度不足からトラブルが多発し、その対策からPOPと不二雄さんが対立。その親子ゲンカをそばで聞きながら、浅川さんたちは不眠不休でマシンを仕上げ、本番に間に合わせた。

ヨシムラの作戦は明快だった。8時間全開。24時間レース的なペース配分なんてなし。AMAスーパーバイクでの走り方で全開が基本。決勝では途中、タイヤ交換の際もウエスクーリーがフロントフォークアクスルホルダーのスタッドボルトを折ってしまった。だが、この構造はSTDと同じで、ボトムケースにスタッドボルトがあり、そこにキャップをかぶせてナットで留める方式。

不幸中の幸いか、スタッドボルトはギリギリでナットがかかるぐらいネジ山が残った長さで折れていたため、キャップ側を削ってスタッドボルトの山を多く出し、走行中にスペアパーツを加工して、次のピット時に交換、事なきを得た。

結果は見事優勝。ライバルのRCBは転倒とマシントラブルで自滅した……。大メーカーに一介のチューナーであるヨシムラが勝ってしまったのだ。

と、同時に8耐の戦い方が決まった。それまでの24時間レースとはまったく異なり、スプリントレースを8本やる。こうして世界でも例を見ない厳しいレースが形作られ、他メーカー・チームのマシン/体制作りが大きく